

# 絵カードと身体的ガイダンスによって性器いじりの場所を限定する指導 — 小学部1年生の知的障害がある自閉症児を対象として —

Genital Fondling: Teaching When and Where to Self-Touch.

○児島 由佳\*・山崎 仁寛\*・島宗 理\*\*

(\*鳥門教育大学附属特別支援学校) (\*\*法政大学)

Yuka Kojima, Yoshihiro Yamazaki, and Satoru Shimamura

(\*Special Support School Attached to Naruto University of Education) (\*\*Hosei University)

Key Words: 性器いじり, 知的障害, 自閉症, 構造化, 身体的ガイダンス

## 問題と目的

性器いじりは子どもの発達過程ではよく観察される健全な行動であるが、知的障害や発達障害を持った子どもの中には、人目につくところでもパンツを脱いでしまったり、自己刺激に執着して他の活動に支障がでたり、外出時に制止が難しくなって、保護者から指導に対する強い要望があることもある。しかし、性的な行動特性のためか、これまで性器いじりを標的行動とし、その指導に取り組んだ研究はほとんどみあたらない。そこで本実践研究においては、知的障害と自閉症を併発した男児を対象に、性器いじりをする個室を用意して限定し、前兆行動を手がかりに児童を誘導することで、人目につくところでの性器いじりを減らすことができるかどうか、そして本人が自発的に個室に行けるようになるかどうかを検討した。

## 方法

### 対象児

A特別支援学校小学部に在籍する児童(男子、実験開始時7歳5ヶ月、太田のStage: I-3、新版S-M社会生活能力検査: 社会生活年齢1歳10ヶ月)が参加した。学校では周りに人がいてもパンツの中に手を入れて触ったりしていた。家庭でも同様で、保護者から性器いじりを減らす指導が要望されていた。研究開始前に副担任から保護者に研究の目的や方法、結果の公表などについて説明し、書面で合意を得た。

### 場所

指導は学校で行った。教室は仕切版により、集団指導のための空間、個別学習の空間などにすでに分割されていた。構造化の手法を用い、個別の活動スケジュールを提示していた。対象児は担任からの時々のプロンプトがあればこの活動スケジュールに従ってほぼ自発的に行動できるようになっていた。性器いじりをする場所を限定するために、教室内に仕切版を用いて、1 m x 0.7m の個室を設定した。家庭では押入に限定し、保護者にも記録を依頼した。

### 標的行動と従属変数

副担任および母親が学校と家庭で対象児の性器いじりを事象記録法によって記録した。個室に自分から行ったかどうかを記録した。一日あたりの性器いじりの回数および対象児が自分で個室に行った回数を従属変数とした。

### 指導手続きと独立変数

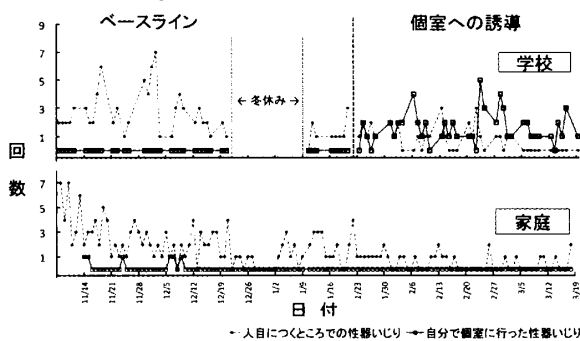
ベースラインでは記録をつけるだけの計画だったが、家庭では保護者の判断により、居間で性器いじりが生じたら押し入れに誘導するように指導が開始された。学校では、ベースラインの記録から、性器いじりをする直前には100%の高頻度でズボンの腰部分に手をかけていることがわかったので、これを前兆行動と同定した。

指導には、個室に対応した絵カードと身体的ガイダ

ンスおよびフェイドアウトを用いた。副担任や担任教員は、対象児がズボンに手をかけたことに気づいた時点で、絵カードを渡し、腕を支えて立たせたり、個室まで背中を軽く押して歩かせたりするなどの身体的ガイダンスを用いて誘導した。身体的ガイダンスは徐々にフェイドアウトした。同じ絵カードは個室の入口にも提示し、入室前にはその下の箱に渡された絵カードを入れてから入るように促した。

## 結果と考察

下の図に学校と家庭における性器いじりの頻度を日毎に示した。家庭では測定開始後に性器いじりの頻度が減少し、保護者からは指導の結果に対して肯定的な評価をいただいた。居間でテレビを観ているときに保護者によって押し入れに誘導されることがタイムアウトとして機能した可能性がある。ただし、家庭においては対象児が自発的に押し入れに行く行動はほとんど自発されなかった。



学校では絵カードと身体的ガイダンスを用いた指導によって、対象児が自発的に個室に行く行動が増加し、個室以外での性器いじりは見られなくなった。性器いじりの頻度もベースライン期に比べると減少した。これまでは触りたいときにその場で触って自己刺激により強化されていた行動が、個室まで歩いて行くという行動コストあるいはその場の他の好子を失うというタイムアウトによって弱体化されたのかもしれない。

本事例では構造化のアイデアを用いた指導がすでに行われている児童が対象だったため、カードを使った移動や個室での活動、活動終了後に元の活動に戻る行動などがすでに獲得済みであり、このために指導が比較的円滑に進んだ可能性もある。子どもの将来のQOL向上を見据えるならば、性器いじりよりも強力な好子となる活動(遊びなど)や刺激(絵本など)を拡張することで、性器いじりの総頻度を減らすことが重要である。今後はそのような新しい余暇活動の指導の効果の検証も必要である。